

1 アベノミクス成長戦略「女性が輝く日本」

- ① 女性の活躍促進や仕事と子育て等の両立支援に取り組む企業を応援するインセンティブ付与等
- ② 女性のライフステージに対応した活躍支援
- ③ 男女が共に仕事と子育て等を両立できる環境の整備

→

「我が国最大の潜在力となっている「女性の力」を最大限発揮できるようにする」とは、少子高齢化で労働人口の減少が懸念される中で、新たな成長分野を支えていく人材を確保していくためにも不可欠である。」

(内閣府男女共同参画局 男女共同参画白書『成長戦略の中核としての女性の活躍促進』)

＝「産業競争力会議」の経済の成長戦略として女性の材人材活用という視点

「女性が輝く社会」とは、「女性が輝く」とは、

2 「あらためて」

- ① 「」と新しく、あらたに」
- ② 「」これまでの」ことを含味し改めて」

「家はどうなるか、又どうなって行くべきであるか。もしくは少なくとも現在において、どうなるのが」の人たちの心の願いであるか。それを決する為にもまず若干の事実を知つていなければならぬ。明治以来の公人はその準備作業を煩はしがつて、努めて」の大きな問題を考えまいとしていたのである。」

(株式会社 KADOKAWA 柳田国男『先祖の話』)

3 文明と文化

文明 civilization 人為としての civil (市民) が自然 (野蛮) を制御する「」によって得られたもの
文化 culture 特定の場において cultivate (耕) され蓄積されてきたもの

→ 人はつねに文明と文化の両面を生きている。

文明・文化の特徴

文明は、普遍性を持つて他の多様な文化をひとつつの形態に均そろとする。(近代化・グローバル化)
普遍性 universe=uni (ひとつの) +verse (回る)

→ 「アルビーザー効果」
(書士社 村上陽一郎『文明の中の科学』)

文化は、普遍性・共通性を持つまいとして共同体の閉鎖性に閉じこもりやすい。

明治以来の日本は近代文明化(西洋化・アメリカ化)させつつも、日本文化を共存・重層させてきた(和魂洋才、東洋道德・西洋芸術など)。

→ あらためて、日本文化と女性といつテーマで考える

4・1 場をととのえ、もてなす女の力①

「私は、土岐善磨の戦後始まりの歌を思い出す。1945年8月15日の家の出来事を歌った一首だ。あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻のさびしげにいふ

明治末から大正にかけて、啄木の友人として、戦争に反対し、朝鮮併合に反対した歌人土岐善磨は、やがて新聞人として、昭和に入つてから戦争に肩入れした演説を表舞台で国民に向かってくりかえした。そのあいだ家にあつて、台所で料理をととのえていた妻は、乏しい材料から別の現状認識を保ちつづけた。思想のこのちがいを、正直に見据えて、敗戦後の歌人として一步をふみだした土岐善磨は立派である。

敗戦当夜、食事をする気力もなくなつた男は多かった。しかし、夕食をととのえない女性がいただらうか。他の日とおなじく、女性は、食事をととのえた。この無言の姿勢の中に、平和運動の根がある。」

(朝日新聞 2003・3・24文化欄 鶴見俊輔『殺されたくない』を根拠に) (1)

ととの・える【調える・整える・齊える】

①人びとを呼び集めて指揮下に入れ整然と行動させる。②乱れているものを秩序づける。きちんとした形にする。整頓する。「服装を—・える」「息を—・える」「味を—・える」③(音律などを) 合わせる。調和させる。④必要なものを備える。落ちのないように用意する。「非常食を—・える」⑤相談事を具合よくまとめる。「交渉を—・える」「縁談を—・える」⑥買いそろえる。「デパートで晴着を—・える」

(岩波書店 『広辞苑』第六版)

4・2 場をととのえ、もてなす女の力②

もて・な・す【持て成す】

「モテは接頭語。相手の状態をそのまま大切に保ちながら、それに対し意図的に働きかけて処置する意。」

(岩波書店 『岩波古語辞典』補訂版)

①とりなす。処置する。②取り扱う。待遇する。「我が子のよう」「—・す」③歓待する。「馳走する。」「心づくしの料理で—・す」④面倒を見る。世話をする。⑤自分の身を処する。ふるまう。⑥取り上げて問題にする。もてはやす。⑦そぶりをする。見せかける。

(岩波書店 『広辞苑』第六版)

その場をまとめしていく総合的なマネジメント

↑ 折口信夫 「まれびと(稀人・客人)」 信仰

II 女性、主婦の仕事 (特權)

祭祀、食べ物や衣服などの分配、酒の管理、提供。(とじ刀自 ↑ 杜氏)、女将

5 『昔話と日本人の心』

日本の昔話

「女性の田」で見るところ「」とは?・
日本人の自我は?

6 敬して遠ざけられた女性の力

「薩摩の」ときはつい近い頃まで、婦人を憎みきらう」とをもって、強い武士の特徴としていたこと、西洋のシバルリーとはちょうど正反対で、戒律のやかましい聖道の僧などよりも、さらに過ぎたるものがあった。堂々たる男子がわずかの接近をもって、すぐにめめしさ柔かさにかぶれるものと信じたはずがない。きたないとか穢れるとかいう語で言い現わしていたけれども、つまりは女には目に見えぬ精靈の力があつて、砥石を跨ぐと砥石が割れ、釣竿・天秤棒を跨ぐとそれが折れるというように、男子の膂力と勇猛とをもつてなし遂げたものを、たやすく破壊し得るものとの「とく、固く信じていた名残に他ならぬ。」（中略）「女の力を忌み怖れたのも、本来はまったく女の力を信じた結果であつて、あらゆる神聖なる物を平日の生活から別置するのと同じ意味で、実は本来は敬して遠ざけていたもののようにある。」

（株式会社 KADOKAWA 柳田国男『妹の力』）

7 「もののあはれ」

「あわれ」の美意識が完成するためには？

（参照 岩波現代文庫 河合隼雄『昔話と日本人の心』）

※「めめしきはかなき」ととしての日本文化

大方人のまことの心の奥のくまぐまをさぐりて見れば、みなただめめしく、はかなき」との多かるものなるを、雄々しくさかしげなるは、自ら顧みて、もてつけ守りたるものにして、人に語るときなどは、いよいよ選びて、よさまに上辻を飾りて「そのものすれ、ありのままには打ち出です。

（筑摩書房 本居宣長全集 第4巻 大野晋／大久保正 編集・校訂 『源氏物語玉の小櫛』 1969年刊）

○「あはれとだにのたまはせよ」

（「柏木」紫式部『源氏物語』）

「日本の文化というのは本来的には『たおやめぶり』、つまり女性的なものなのだ」

（中公文庫 司馬遼太郎／ドナルド・キーン『日本人と日本文化』）

7 女性の力